

住まい事始め「家族の広場ーリビング・ルーム」

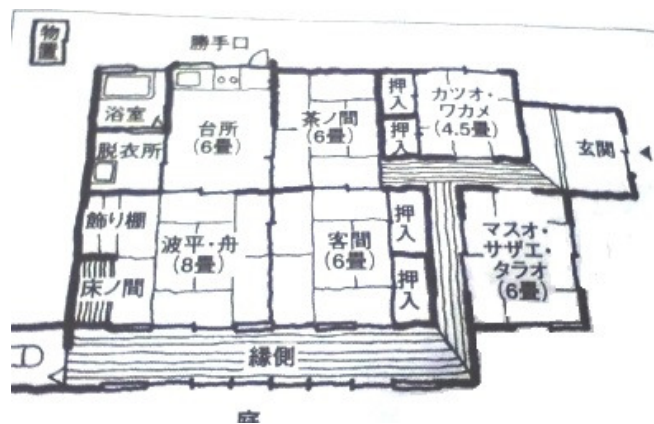
xNLDK+Sとリビング・ルーム

家づくり・間取りを考えるにあたり、リビング・ルーム(居間)をつくりことは要る要らないを検討するまでもなく、当然つくるものとして考えられています。このリビングのスタイルは型式化の傾向があり、ソファや椅子をデンと配置したリビングの写真を見かけます。

xNLDK+Sは、家の間取りのタイプを表す形式で、うちの間取りは、2LDKですといえば、相手はその家の様子がわかります。しかしそれはただ家の部屋の数を表しているだけでその中身、部屋の大きさなどは不明です。

玄関の項で書きましたように、日本では靴を脱ぎ室内に入るスタイルをとっています。西洋のように靴を履いたままの生活ではなく、椅子式生活とはいっても床面が清潔なので床にゴツと横になって寛ぐこともできます。

そうした点から考えると、室内に大きなソファや椅子を置くよりも、昔の和室のように少ない家具の中でスッキリ過ごす空間にするように考えることもあります。



サザエさんの家 磯野家の間取りとその暮らしとは？ - 金子哲也 [マイ ...のHPより]

今日の住宅の形式は、なんとなく30坪ほどの大きさを想定したxNLDKですが、家族の団欒や憩いの空間として、多様なリビングルームを創出してもよいと考えています。

ウィキペディアを検索してみました。

居間(いま、Living room)は、住宅の中にある部屋の一つ。家族が一家団欒を楽しみ寛ぐ部屋と考えられている。リビングルーム、リビングとも呼称される。

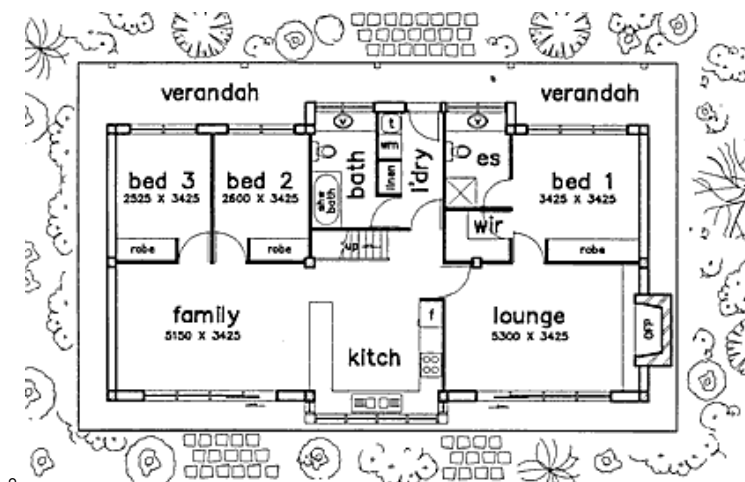
もともとは、「drawing room」と呼ばれ、これは食堂(ダイニングルーム)で一同が会しての食事の後、男性たちが、政治や世間の話、つ

まり男性だけの話を始めると、女性・子供たちはその場から引き下がり（draw）食堂に隣接した控えの間で過ごしており、その部屋のことを指したといわれる。

やがて女性・子供が寛げる肩の凝らないこの部屋に男性もまた加わるようになり、居間は現在のような家族の憩いの間になった。

この意味での居間は玄関から遠い、家の比較的奥の部屋のことをいい、そこに来客が通されることは、親族を除いてほとんどない。

ただし、アメリカでは玄関のすぐそばの家族が使用していない部屋、来客用の予備の部屋（ゲストルーム）を「リビングルーム」というようで、今日、日本国内でも新築の住宅で、玄関のそばの部屋をそのように呼ぶ場合もある。しかしそれでは、家族がそこで平素、寛いだ時間を過ごすわけではないので、呼称に現実がマッチしないという矛盾が生じている。



この家のラウンジは来客用、ファミリーは家族用のLD?

「海外のお家の間取り図ってどんなの? - NAVER まとめ」のHPより

茶の間（ちゃのま）とは、日本家屋の中で、家族が集う、生活の中心となる部屋のこと。日本家屋においては「居間」「リビングルーム」に相当する空間であるが、食事をする「食堂」「ダイニングルーム」の役割も兼ねることが多い。

民主主義を表現する住宅

1950年代、60年代の日本の住宅建築は、家族生活と空間の対応が重要なテーマであった。敗戦によって家族概念が大反転された後、近代家族のための住居が模索されていた。その民主主義に基づく家族を収容する住宅のお手本が、アメリカのモダンリビング と、社会化する住宅 - architecture WORKSHOP | PROFILE

(<http://www.archws.com/profile/publications/03.html>) のサイトに戦後の住宅建築の変遷について書かれてあり参考になりました。